

---

# バビロン

某県民

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バビロン

### 【Nコード】

N8959Y

### 【作者名】

某県民

### 【あらすじ】

僕は茨城から大都会東京へ越してきたしがない学生だった。しかし、4月10日、僕の生活はとある一枚の紙切れ、「無法都市永住許可書」のために一変する。

「ようこそ、バビロンへ」

無法都市「バビロン」そこは名の通り、法秩序のない世界。倫理、世俗とはかけ離れた異質な空間。あるのはただ一つ。歪な「ゲーム」だけ。掛け金は己が命。配当金は「現金」「地位」「利権」なんでもござれ。欲望、謀略渦巻く異能混沌劇、始まります。

## 新生活 一日目

今日は4月9日。春がいよいよにその暖気と、特有の霽圀氣を各地にもたらず今日この頃。僕、空丘詠<sup>そいつおかんあ</sup>亜は布団から体を起こした。布団の上に立ち上がって薄いタオルケットのような掛布団を僕は二つにたたむ。この季節になってくると空気は暖かいもので、自然の布団のように僕に覆いかぶさってくれる。もとよりきっちりとした掛布団を持たない貧乏な僕にしてみればうれしい季節だ。たたみ終わった寝具一式を部屋の過度に積むと、軽い音とともにすこし埃が舞った。埃は春の木洩れ日を受けてわずかな光の軌跡を描く。それを目で追って僕は窓の外を見た。そこには黄色い朝日が葉の隙間から漏れ出し、なんともはかなげな、しかし今日という日を祝福してくれているような、そんな温かさを醸し出していた。

「おはようございますっ」と

誰も返してくれる当てのない挨拶。もちろん僕もそれは知っている。けどこれはずっと小さいころからの習慣みたいなもので、特に悪いことでもないと思っているので直すつもりもない。今日という一日を始めるといふ認識を僕は持つことを重要としているのだ。それは僕なりの流儀でもあった。つぶやきはこじんまりとした和室に少しだけ響いて消えた。布団とわずかな洋服、それと勉強道具一式。それしかないにもかかわらず僕の部屋は十分に圧迫されてしまっていた。僕一人が生活するうえでは全く問題はない程度ではあるが、一般的に言えば狭い部屋だ。そこには生活感はあるでない。洋服もきっちりたたまれただけであるし、教材に至っては開いてすらいない。僕は洋服たちの中から一組を選び出すと、ほかの服を乱さないように慎重に取り出した。

「えっと…今日はこんな服でもいいよね」

僕は寝間着を脱ぎ、外に出かけるための服に着替える。脱いだ寝間着はきつちりとたたんでおいておく。あとで水で手洗いすることにはなるのだが、すこし気になってしまふのだ。うすい上着のボタンを数個止める。シャツの隙間からすこし鎖骨のあたりが見えてしまいう。僕としては何とも落ち着かないのだけど、この服をくれた人がこのように着ればいいといっていたのできつとそうなのだろう。まだ春なのにもかかわらず、すこし着崩した感じに見えるのが少し気になったが、与えてくれた人の好意をむげにはできない。着替えを終えた僕は洗面所へ向かう。そこはとても狭かったが、僕一人が使用するのなら何ら問題はないものだった。蛇口をひねる。外の雰囲気とは対を成すようにそこから流れ出す水はとても冷たかった。それに少し驚きながらも顔を洗う。顔に触れたそれは、手を感じるよりもことさらに冷たかった。

「けどすつきりしたね」

僕は少し独り言を言ってしまう癖があるのだろうか。新生活の始まりに少なからず浮ついているのかもしれない。もちろんその声にこたえる人はいない。タオルで顔を拭いて、視線を戻す。するとそこには人影が…そう思っ僕は内心かなり驚いたのだが、それは鏡に映っている自分の姿であつた。

「どんだだけ寝ぼけてるんだよ…僕…」

自分の臆病さと間抜けさに内心がっかりしながら僕は洗面所を離れて、リビングに向かう。そうとはいつても、その一部屋しか洗面所を除けばないのだけど。肩から下げるポーチのような鞆に必要な最低限の貴重品を入れる。一人暮らしを始めた僕が持つ貴重品なんてい

うのはたかが知れていて、携帯電話と財布くらいしかない。ゲームや音楽プレイヤーはもっていない。少したったことがあるくらいで、別段ほしいとも思わないので手に入れていないのだ。しかし財布と携帯電話だけではやはりバッグの中身がさびしい。そうおもった僕は教材一式の中から一つを中身も見ずに選び出し、かばんの中に入れる。

「うん、こんなもんでいいよね。持つてる実感ができた」

かばんは先ほどよりも重く僕の腕に存在を伝えてくれている。このくらいの重さがないと気持ちが悪いし、なにより鞆がスカスカで格好が悪いだろう。見栄えもそうだし、歩きたびに大きく揺れてしまふのは僕としても快適ではない。

「あれ、かばんいらないんじゃないかな…」

僕は少しだけそう考えたけれど、バッグを持たないで昼間からうつく青年はいい風にはとられないだろうなと思ったからやはりバッグはさげてくことにした。あらかたの支度を終えたので僕はもう一度部屋を見回す。そこにあるのは無機質な空間で、ちらかっているものもなかった。忘れ物がないことを確認すると僕は玄関へ向かい靴を履く。すると紐靴のひもを結ぶときに一度縦結びをしてしまった。どうやら今日の僕は少しおかしい。ふだんなら絶対にこんなことはしないのに。

「よし…じゃあ行ってきますね」

立ち上がって誰もいない部屋に言う。この独り言の多さはもしかしたら一人暮らしへの不安感からきているのかもじれない。返事がないことを確認して僕は満足すると扉を開ける。軽い金具のこすれる

音とともに春の空気が僕に絡みつく。部屋の中よりもさらに甘く、温かいその雰囲気全体を感じながら部屋の外へ。ドアを閉めて鍵をかける。なんとも質素な力ギであるがそもそもこんなところに盗みに入る輩もいないだろう。僕は大きく深呼吸をする。今日もまた一日がはじまる。けどそれは今までのものとは異なっていることは間違いないだろう。その期待に胸を膨らませて、僕はまだ未知の世界が広がる部屋の外、慣れない都会の喧騒へ向けて足を踏み出した。

## 白衣の青年

早朝にもかかわらず、町は喧騒に包まれていた。たくさんの同年代の少年少女が目の前を通り抜けていく。彼らの服装、髪型は、田舎のほうから引越してきた僕にはかなり刺激的で、驚愕に値するものであった。ある子は頭から7色くらいの髪をはやし、まるでミックスベジタブルのような有様であったり、またある子は鼻や舌にピアスをしていたりしていた。もちろん普通の恰好をしている人のほうが多いのだが印象が強烈過ぎてそれ以外をなにも覚えていない。まわりには田舎では絶対に見ることができないであろう高層ビルがたくさん並んでいたような気もしたが僕の意識の片隅に追いやられてしまっていたようだ。僕は生活に必要であろう生活用品をうつている店、スーパーなどの位置をあらかじめ確認し終えて、休憩のためにとある喫茶店にいた。町にはサービス業の店が多く、そのようなお店を探すのはなかなか骨が折れた。

「結構歩いたから疲れちゃったよ……」

そういいながら僕は細い足を軽くたたき。我ながらあれ程度の運動で足がダメになるとは思わなかった。自分のひ弱さに落胆しながら僕は注文したアイスティーとサンドイッチの乗ったトレイを受け取り、どこに座ろうかとあたりを見回す。すると僕の耳が何やら興味深い声をとらえた。

「聞いたかよ…今回も出たらしいぜ？」

「マジで…どんな感じだよ？」

「また女が殺されたのか？」

食事の場にはふさわしくない話題に大いに盛り上がっている少年3

人が喫茶店の隅にいたのだ。奇抜なファッションに身を包んだ彼らは声を少し落としてしゃべってはいるが、話の雰囲気を出すためであって周りの客への気遣いなどはかけらもないであろう。その証拠に彼らの眼は嬉々として輝いて、話している少年を見つめていた。けど僕にはそれを咎める勇氣はなかった。情けないとは思いつつ、しかし新しく生活することになった都市で何が起きているか知る必要があるだろう、そういつて好奇心を正当化した僕は彼らの隣の一人用の席に腰を下ろす。疲れてしまったし、喉も乾いた。まずはアイステイーを口に含もうと手を伸ばすと先ほどの少年が続けて口を開いていた。

「なんでもはらわた抜き出されて、それでぐるぐる巻き…ミノムシみたいにされてたらしいぜ…部屋一面が赤色だったらしいし」

「マジか、相変わらず頭おかしいな」

「けど今回もなかなかに愉快じゃん」

そういつて何が楽しいのか、ケタケタと笑う。その内容の悲惨さに思わず僕は少年のほうへ向きなおってしまった。興味、というよりも何かそれがとても重要なように感じたのだ。僕の視線を少しだけ怪訝な目で見た彼等であつたが、一度小さく笑いあうとすぐに話を再開する。先ほどまでより声を大きくして、手振りまで合わせて説明を始めた。

「被害者は若い女、結構有名な美人さんだったらしいが…ごあいにくだな」

「ってことはやっぱりあいつかよ」

あいつ。それが誰を指すのか、僕にはてんで見当がつかなかったが彼らはそれで通じ合っていたようだ。僕は彼らの話に耳を澄ませる。

ベジタリアン

「ああ、「殺人鬼」、またあいつだよ」

「いやあ、律儀だね。また女か」

また高らかに彼らは笑う。その時点で僕はやっと事態を理解した。

ベジタリアン

「殺人鬼」

それはネット上から生まれた一人の殺人鬼の名だ。いまやそれは社会一般でつかわれるようになっていく。国内外問わず彼は指名手配を受けている超危険人物だ。彼がなぜそこまで存在を知られているのか、それは彼の手にかけた人数、またその主義によるものだ。もはや彼の殺した人間の数は数えきれないほどで、記録では1000人ほどといわれているが、その程度で済んでいるかどうか：現在の行方不明者のうち数十名は彼の手にかかっているといわれている。そしてその被害者のすべてが女性であった。犯行現場は毎回によってその様相を変え、ある時は一面血の海、またある時はまるで外傷もまったくないような静かなものであったりした。しかし、どの遺体のも共通していたことが一つ。そこに彼の獲物であるナイフが毎回放置されていること、そして彼がおそらくこの行為を楽しんでいただろうという不気味な印象がその場には毎回残っていることがあった。その不気味な犯行理念、犯行現場、それがこの国の若者の危ないもの見たさを刺激してしまった。「彼は美人、もしくはかわいい女性しか殺さない」そんな噂がネットを通して飛び回り、その凶行に一つの名前を与えてしまった。それが殺人鬼<sup>ベジタリアン</sup>。女しか殺さない殺人の菜食主義者である。一部の人間は何かのヒーローのようにすら思っている。そしてそんな最悪の殺人鬼の活動の中心がこの町であるのだ。

「…気味が悪いよね」

ご飯を食べ終えた僕は席を立つ。軽くなったトレーを返却コーナーに返す。奥には機械的に働き続ける若者が数名見られた。小さくご馳走様とつぶやいて、僕は喫茶店を後にする。

するとどうやら先ほどの少年たちも落ち着いたようで、席を立つ。しかし、彼らはトレーを戻しに行くそぶりを見せることなく出口に向かってくる。彼らの背は思ったよりも大きくて、威圧感を溢れさせていた。それと視線を合わせるのが怖くて僕は急いで喫茶店を出た。

「さてと…次は…」

僕はバッグから地図をとりだして次の目的地を探す。土地勘などまったくないので、地図がないと僕は家にすらたどり着けないだろう。細い路地と、建物の名前とにらめっこを続けていると、ふと声をかけられた。

「お兄さんさ…金貸してくれね？」

声の主は先ほどの殺人鬼の話をすすんで披露していた少年だった。僕がそれを確認するころにはほかの二人が僕の周りを囲んでしまっていた。彼らは目をぎらつかせて僕を見ている。特に財布の入ったバッグをその双眸で見つめていた。

「なに言ってるんですか…」

僕は気が気でない。けどそれを見せてはいけないと頑張っ取りつくろおうとするのだが、それも無駄なあがき…彼らには僕が弱い人間だと感じたのだろう。それは真実であるし、だから僕は彼らになけなしの金を渡そうとしている。この都市の治安が良くないというのは聞いたことがあったが、まさかここまで速い段階で絡まれると

は思わなかった。

「いや、さっき俺たちの話、盗み聞きしてたでしょ？情報量ってことでさ」

また下品に笑う。確かに盗み聞きをしていたけど…僕はそれがとても気に入らなかったが、何もしない。何もできない。ここで抗ったところで、きつと僕は暴力を受けてもつとひどいことを受けるのは目に見えている。僕はバッグから財布を取り出して、お札を数枚渡そうとして……

「何やってるの君たち？昼間からよくないねえ」

聞き覚えのない青年の声を聴いた。その声のほうを向くと、そこには白衣に身を包んだ、長身で細身の青年が立っていた。彼は癖のある黒髪を指でくるくるといじりながら、すこし上体を前へ傾けて、僕の周りの少年たちを見つめていた。彼は色白の腕をすらりと白衣のそでからのぞかせ、細い体をゆっくりと揺らしながら僕にちかづいてくる。腕と脚は驚くほどに細く、まるで針金細工のようであった。長い脚に似合わない短い足取りはどこか弱い。

「あ？誰だよ、おっさん」

その弱弱しさは少年たちも感じ得たようで、彼らは僕を見る目つきのままに彼を見ている。彼らからすれば獲物が一人増えたくらいの認識なのかもしれない。僕は困いが外れたことに少し安堵しつつも、その青年が気になって仕方がなかった。どう考えてもここでの介入はかれにとってプラスに働かないだろう。ましてや1対3、部の悪さは明白だ。それにもかかわらず、青年は相変わらず髪をいじる片手を休めようとせず、さらにはかけている質素な感じの黒縁メガネ

の位置が気になるようで、何やら独り言をつぶやきながらそちらもいじり始める。それがひどく自分を馬鹿にしているように見えたのだろう。少年たちの一人が青年へ詰め寄る。

「なめてんのか？ ああ！？」

「なんだか君のほうが僕よりおっさんさを感じるね…それ、まだ使ってる人いたんだ…」

その少年は怒り心頭したのか大きく声を荒げる。今にもつかみかかりそうなほどだ。僕はそれをなぜか息をのんで見守っていた。少年の憤激を見ても青年は相変わらぬ態度を見せ続ける。逃げればよかったものを、その場から僕は離れようとしなかったのだ。それは義務感なんかじゃなく、純粹な好奇心。まるで僕みたいな弱い青年が、果たしてこれから何をするのか、気になって仕方がなかったのだ。すると白衣の青年からふと声をかけられた。

「おっさんって…ねえ、君。僕、そんなに老けて見えるかな？」

黒縁のメガネをずらしながら彼は僕の眼を見つめる。不思議な雰囲気目の眼であった。しっかりと僕の眼を見ているのに、どこかつるなその視線は、若干の圧迫感すらあった。

「いや…どこも…」

「だよねえ…」

僕は反射的にそう答えていた。すると青年は満足そうにうなずいている。僕を含めて周りの4人は彼を怪訝な目で見つめる。

「だよね。よし、憂いも晴れた。お礼に君を助けてあげよう」

高らかにそういうと彼は髪とメガネをいじるのに使っていた両腕を白衣の中にしまいこむ。そうして彼は少年たちの前に堂々と仁王立ちした。そのあまりのギャップのある態度に少年たちはたじろぐ。その間青年は少年たちから視線を切つて、なにやら思わせぶりに頭をひねっている。しかし、少年たちもそれで引き下がっては格好がつかないと一歩詰め寄ろうとした。そしてそれに応ずるようにして青年がポケットから手を出して――

「あ、あつたあつた。何万円くらいで引いてくれる？」  
「は……？」

思わず驚きの声が漏れた。ポケットの中にあつた彼の手には、数枚の一万円札が握られていたのだ。彼はまた姿勢を崩して、10枚ほど数え上げる。その様子に少年たちも口をあんぐりとさせている。僕もそれは同じであつた。

「いやいや、白衣の中に入れてたんだけど、どこにあるかわからなくなっちゃってさ。ごめんね、待たせちゃって。そうだ、10万円くらいあればいいよね？」  
「お。おおっ」

そういつて彼は10枚の一万円札を少年に握らせる。いまだに彼らは状況を飲み込めていないようで、気の抜けた返事を返していた。それを笑顔で見届け、手を振って追い払うと、青年は僕のほうへ歩いてきた。足取りは相変わらず弱弱い。少しでも触れようものなら形を崩してしまう針金細工のような人だった。

「ふふ、感謝したまえよ。僕に出会えたことを」  
「あ、ありがとうございます……」

僕は一連の出来事に啞然としながらも条件反射的に礼を告げる。実際に助けてもらった訳だし、必要だろう。僕の謝礼をかみしめているのか、青年うんうんとうなずいている。やはり変わった人だ。すると青年はまた笑いながらいった。

「まあ、積もる話もあるだろう。あそこの喫茶店にでも入って語り合おうじゃないか」

そういつて僕の肩を抱く。まるで親友のような扱いであつたがもちろんそんな仲ではない。もちろん積もる話もない。だが言いたいこととならずこし前から積もり始めた。あなた、変な人です。

「良いですよ…けど変わってますね…」

「よく言われるよ」

彼はまたまた嬉しそうに笑うと白衣のポケットに手を入れて先に行つてしまった。先ほどよりも足取りが軽快に視えるのは気のせいだろうか。彼の白衣の裾を追いかけて、僕は先ほども入店したお店へ再度入ることになる。なんとも不思議でおかしな客だと思われるかもしれないが、構わない。あの青年と少しだけ話してみたい気がしたのだ。僕は浮ついた心を少しだけ抑えて喫茶店の扉を開けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8959y/>

---

バビロン

2011年11月27日16時56分発行